

お盆に『いのち』を考える

東洋一といわれる高田公園の蓮は、お盆を迎える今が花盛りです。

皆さんはお盆休みをどのように過ごしていますか？

お盆のこの時期に、家族が集まってお仏壇やお墓にお参りをされる方もおられると思います。

ご先祖様や亡くなられた大切な人に思いを馳せてお参りをする事で、受け継がれてきた『いのちのつながり』を身近に感じ、私が今ここに在るということの感謝も感じられるのではないでしょうか。

約40年前までは、ほとんどの日本人が自宅の畳の上で、家族に見守られながら最期を迎えていました。ところが今では、ほとんどが病院で最期を迎えています。

一般的に幼い子どもは、ぬいぐるみやお花など全ての物に『いのち』があると感じ、『死』を眠りととらえ、いつか目覚め

ると思っています。それが10歳頃になると、『死』は誰にでも訪れて、死んだら生き返らないということが理解できるようになるといわれています。しかしある調査では、小学4年生の約15%、中学2年生の約18%が『人は死んでもまた生き返る』と思っていたという衝撃的な報告がありました。

現代の子どもたちは、昔に比べて、自宅での祖父父母の看取りや葬儀など、人の『いのちの終わり』を実際に体験する機会がほとんどなく、その代わりに、テレビやゲームなどで簡単に登場人物が生き返る姿をみて、生と死の仮想と現実の区別がつかない状況に陥っているのかもしれない。このような、現代の子どもたちの『いのち』のとらえ方は、いじめや非行、凶悪な犯罪へとつながってしまいう可能性があると心配されています。

『死』は縁起が悪いとか、子どもと『死』について話すこと

は、子どもが自殺を考える危険があるとの不安から『死』について語ることを遠ざけてきました。しかし、私たち大人には、子どもたちに『いのちの尊さ』を伝えていくという重要な役割があります。私たちがこの世に生まれてきたという奇跡への感謝だけでなく、私たち『いのち』は、いつか終わるといふ事実に向き合い、『限られたいのちをどう生きるか』について、子どもたちとともに考えていく必要があるのではないのでしょうか。

お盆は、普段は話題にしにくい『いのち』や『死』、これからの生き方について、家族と話すための絶好のチャンスです。これからの人生をいきいきと過ごしていくために『いのち』について一緒に考えてみませんか。

新潟県立看護大学

臨床看護領域 小児看護学

准教授 大久保明子